

「ヤングケアラー」が問いかけるもの

－ ゼロトレランス（非寛容）とインクルーシブ教育 －

ユキちゃんは小学5年生。お母さんとの二人暮らしです。

お母さんはこのごろ仕事を休んで寝込むことが多くなりました。“うつ”という言葉を知りましたが、ユキちゃんにはよく意味がわかりません。

ただ、お母さんがシクシク泣いていたり、ときどき「死にたい」などつぶやくのを聞くと、ユキちゃんは心配でたまりません。だから、ユキちゃんは学校を休んでお母さんのそばにいます。買い物や家事など、お手伝いも一生懸命にしました。

小学生のユキちゃんには、市役所に相談したりヘルパーさんを頼む、なんていう知識があるはずがありません。近所に相談できる人もいません。

ある日、学校でユキちゃんは先生から叱られました。「ユキさん、このごろどうしたの？ 宿題もやってこないし、忘れものばかりじゃない！」

お母さんが……と言おうとしましたが、先生の怖い顔を見るとユキちゃんは何も言えませんでした……

ヤングケアラー

6年前に藤沢で実施された学術調査がある。「ヤングケアラー」についての実態調査だ。あまり知られていないが、藤沢の先生たちの協力なしにこの問題に光が当たることはなかっただろう。

「ヤングケアラー」とは家族にケアが必要な人がいるときに、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている18歳未満の子どものことだ。

「子どもが家族をケアするのは良いことじゃないか。何が問題なんだ。」と思うかもしれない。

もちろん、すべてを否定しているのではない。家族のケアがその子の人間的な成長につながることもある。進んでケアをしている子どももいる。

だが、子どもが年齢に不釣り合いなケア役割や責任を負えば、心身の発達や学習、友人関係などにも影響する。やがて進学、就職、結婚などにまで制約が及ぶようでは、それを「美談」で済ませて良いのだろうか。

日本ケアラー連盟は2016年に藤沢市の教員を対象に、「ケアを担う子ども（ヤングケアラー）についての調査」を実施した。この調査から、ヤングケアラーはケアを担うことによって、「遅刻」「欠席」「学力不振」などの影響を受けていることがわかった。

しかし、学校の先生たちは「遅刻」や「宿題をしない」「欠席が多い」という子どもを、どう受け止めてきたのだろう。自戒も込めて言うのだが、「問題のある子」とだけ見て、その子の背景にあるものに気づかずに来たことはなかっただろうか。

調査への協力をお願いに行ったとき、ある校長先生はこう言って調査を快諾してくださった。

「この調査は、先生たちに『子どもをどう見るか』を考えてもらう、大切なきっかけになる。」

さまざまな困り事や困難を抱えた子どもは「SOS」を「問題行動」の形で訴えることが少なくない。

その子を頭から「問題のある子」と決めつけるのではなく、その「問題行動」の背景に何かあるのではないかと考えようとする大人の姿勢と感性があれば、子どもはずいぶん違って見えてくるはずだ。

これは、ヤングケアラーだけのことではない。

ゼロトレランス（非寛容）

もちろん、簡単なことではない。

いま、先生たちはあまりに多忙だ。そのことがゆくりと子どもたちに向き合う“ゆとり”を奪っている。

異論もあるだろう。

「遅刻は遅刻。理由は関係ない。」

こうした声を後押しするのが、一部の学校が導入する「ゼロトレランス（非寛容）」という指導方針だ。

最近、「行き過ぎた校則」や服装、髪型、果ては下着の色などへの一方的な指導が問題となっている。その背景のひとつが、このゼロトレランス理論だ。

ゼロトレランスとは1990年代に米国で始まった



教育方針だ。文部科学省も2006年に初等中等児童生徒課長から発出された「児童生徒の規範意識の醸成に向けた生徒指導の充実について（通知）」の中で、ゼロトレランスを紹介し推奨した。

通知の発出者であった坪田眞明氏は、同課のメールマガジンでこのように説明する。

米国の学校現場に導入されている教育理念及び教育実践を表現したもので、学校規律の違反行為に対するペナルティの適用を基準化し、これを厳格に適用することで学校規律の維持を図ろうとする考え方であり、軽微な違反行為を放置すればより重大な違反行為に発展するという、『破れ窓理論』による説明も見られます。」

これを受け、ゼロトレランスはいわゆる「教育困難校」や一部の私立学校、学校選択制で他校との比較を強いられた学校などを中心に広がっていく。

例えば地元の弁護士会が行き過ぎた校則や指導の一部を「人権侵害の疑いがある」と指摘した福岡市では、

ゼロトレランスの視点での生徒指導
本校では平成20年度よりゼロトレランス（非寛容）の観点に立った風紀指導、学校全体での遅刻指導など様々になっていきます。

福岡のある学校のHPより

市をあげてゼロトレランスを導入していた。もちろん、このような指導方針に疑問を抱く教員も少なくない。

ゼロトレランスで学校の秩序は一見、保たれたように見える。しかし、様々な背景を抱えた子どもはどうなるのだろう。その多くは「非寛容」な学校に絶望し、ドロップアウトしていくだけではないのか。

事実米国ではゼロトレランス導入以降、停学・退学処分者は10～30倍に増加した。処分の対象となった生徒の多くは貧困層や非白人の生徒だったという。

ふたつの子ども観

このような論議は、実は古くから存在してきた。

テレビドラマ「3年B組金八先生」に登場した「腐ったミカンの方程式」と、それに抵抗する金八先生のエピソードを覚えている方もおられるかもしれない。

遅刻は生徒の「規範意識」の問題なのだろうか。それとも、遅刻せざるを得ない生徒の「背景」が問題なのだろうか。

このふたつの立場は、障害者権利条約で示された障害の「個人モデル」と「社会モデル」の対比で考えるとわかりやすい。「障害」をその人の心身の機能の問題ととらえるのが「個人モデル」だ。一方「障害」と

はその人の社会参加を妨げている社会のバリアや差別・偏見のことだとするのが「社会モデル」だ。

もちろん双方の側面があるにせよ、「背景」を一切考慮してくれない非寛容な学校は、困難を抱える子どもたちにとってどれほど息苦しいことだろう。

いま、日本の教育がめざしているのは「インクルーシブ教育」だ。

インクルーシブとは、「包み込む」とも訳される。対義語は「エクスクルーシブ（排除する）」だ。

これは障害のある子どものためだけのものではない。

今日、学校には多様な子どもが通ってくる。外国につながる子ども、LGBTQ、障害のある子ども……ヤングケアラーも、その多様性のひとつとも言える。

多様な子どもたちが、どの子も自分らしくありのままに肯定され、同時に他者を尊重しつつ「共に学ぶ」。インクルーシブな学校とはそのような学校だ。

もちろん、当然に衝突も起こる。多様な子どもたちがどのようにして「共に学ぶ」のかを、常に考えなければならない。だが、それを考えるプロセスこそが「教育」ではないのだろうか。

先生だって多様でいい

子どもだけのことではない。ヤングケアラー調査のあと、何人かの先生が私にこう話してくれた。「実は私もヤングケアラーだったんです。自分のしてきたことの意味が、この調査でわかりました。」

18歳から30歳までのケアラーを「若者ケアラー」と呼ぶこともある。いま現在、自分は「若者ケアラー」だという若い先生もいた。

「ヤングケアラー支援って、どうしたらいいのですか？」と聞かれたとき、最近私はこう答える。

「彼ら・彼女らと同じ経験をしている先生がきっといるはず。そんな先生こそ、子どもたちに自分の経験を話してほしい。きっと子どもたちは『自分を理解してくれる先生』に出会えて、安心できるだろう。」

いま、ただでさえ多忙な職員室で、子育てや介護、あるいは病気などを抱えた先生が肩身の狭い思いをしてはいないだろうか。そんな先生も、どうか引け目を感じないでほしい。仕事とケアの両立に悩んでいることは、むしろヤングケアラーたちと共感し合える教師としての「強み」なのだから。



インクルーシブな学校を作るには先生も多様であってよい。ヤングケアラーとの出会いは、あらためて学校や教育、そして社会のあり方をのあり方を私たちに問いかけているのかもしれない。